

TM&ARG

Discussion Paper No. 153

AED を用いた救命活動はいかに行われるのか？
How lifesaving activities are generated using AEDs ?

福島路 、河野英子 、大沼雅也 、竹内竜介 、高石光一

2024 年 8 月 1 日

TOHOKU MANAGEMENT & ACCOUNTING RESEARCH GROUP

Discussion Paper

GRADUATE SCHOOL OF ECONOMICS AND
MANAGEMENT TOHOKU UNIVERSITY
27-1 KAWAUCHI, AOBA-KU, SENDAI,
980-8576 JAPAN

AED を用いた救命活動はいかに行われるのか？¹

How lifesaving activities are generated using AEDs ?

福島路^{2*}、河野英子³、大沼雅也⁴、竹内竜介⁵、高石光一⁶

要旨

本研究は、医療機器の普及と活用に関する研究の一環である。本稿で取り上げる AED（自動体外式除細動器：Automated External Defibrillator）は、心肺機能停止傷病者に電気ショックを与え蘇生させるための医療機器である。心肺機能停止時に AED が使われたかどうかによって傷病者の生存率あるいは社会復帰率は大きく異なってくる。つまり傷病者の近くにいた一般市民が AED を使用できたかどうかは傷病者の命や将来を左右するのである。しかし現実には AED が十分利用され、AED を用いた救命活動が行われている例は限られている。

これまで国、自治体、医療関係者、企業、NPO など様々な主体によって AED の普及や活用が推進されてきた。本稿はよりミクロなレベルにおいて、市民による救命行為が行われる現場で実際に何が起きているのかを明らかにすることを通じて、何が救命活動の促進要因・阻害要因なのかを考察することを目的としている。具体的には、新聞記事分析、アンケート調査を通じて、AED を使用して市民によって救命がなされた事例についてのデータを集め、救命に資する要因や条件を探索した。

結果、救命に関する知識や救命の経験は救命活動にプラスの影響をもたらすこと、救命活動多くは複数名の（時に即興的な）連携で行われること、救命活動を躊躇させる理由として、AED や救命活動についての知識不足のみならず、被救命者の属性や救命に関する法律知識の不足があることなどが明らかになった。

キーワード： AED、市民による救命活動、救命経験、連携

¹本研究は JSPS 科研費 20H01527（「市民による除細動（PAD）」の国際的普及：制度化過程と変容」代表：横浜国立大学教授、河野英子）の助成を受けたものです。ここに謝意を表します。

² 東北大学大学院経済学研究科、教授

〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1 東北大学大学院経済学研究科
michi@tohoku.ac.jp

³ 横浜国立大学大学院国際社会科学研究院、教授

⁴ 横浜国立大学大学院国際社会科学研究院、教授

⁵ 横浜国立大学大学院国際社会科学研究院、教授

⁶ 亜細亜大学、経営学部、教授

1. 問題意識

日本における令和 4 年の心肺機能停止傷病者の全搬送人員は 142,728 人、その数は年々増加傾向にある（総務省消防局、2023）。心肺機能停止傷病者に対する対応の違いによって、生存率あるいは社会復帰率は大きく異なる。特に 10 分以内に心臓マッサージや AED を使用することによって、それら数字は大きく改善される。

しかしながら、日本では一般市民が心肺機能停止傷病者に対して、常に適切な救命行為をとっているわけではない。例えば令和 4 年に一般市民によって心原性心肺機能停止を一般市民によって目撃された傷病者数は 2 万 8,834 人であり、そのうち一般市民が心肺蘇生を実施した傷病者数は 1 万 7,068 人、つまり 59.1%が一般市民（救急現場に居合わせた人）による応急手当（胸骨圧迫・人工呼吸・AED による除細動）を受け、さらに一般市民が除細動を実施した傷病者数は 1970 人、全体の 6.8%である（総務省消防局、2024）。

つまり心停止になった人が倒れる瞬間を目撃されたとしても、約半数は心肺蘇生を受けられず、除細動も受けられたのは 6.8%にしか過ぎない。これは救命行為を受ければ助かったかもしれない命が失われているという事実を示している。

このような現状を受け、これまで一般市民の救命行為を促進するために、国、研究者、自治体、企業、AED 財団など、様々な主体があらゆる施策を講じてきた。

- ①国（厚生労働省）：法律・規制の改訂（非医療従事者への AED 使用規制の緩和）（大沼、2017、2019）
- ②国・自治体：AED 設置数を増加（総務省消防局、2023）。いくつかの自治体は大規模施設等への設置義務化やコンビニエンスストアとの連携による設置拡大など、効果的な AED 設置による使用率の向上を図っている（河野他、2021,2022、竹内他、2020）
- ③学校教育：AED 使用の啓発活動：AED 講習の増加、学校の教育プログラムへの導入（竹内他、2021）
- ④企業：AED の使用方法について知識がない一般市民でも使用できるような AED の改良（福嶋他 2018, 河野他、2019, 竹内他、2020）

様々な主体によって努力は進められているものの、いざ実際の現場で救命行為が行われず、AED が利用されないことが多いのは、規制、教育、AED の設置場所の問題だけではなく、救命行為に及ぶ「場」がいかなるものであったのか、ミクロレベルの要因があるのではないであろうか。

例えば心理的な要因がある。「バイスタンダー効果」と呼ばれる、「緊急事態に直面した時に、ひとりである時よりも集団にいる時のほうが、事態に対処する行動が抑制される現象」（ラタネ他、1977）は、救命行為を抑制する要因として指摘されている。他方で常に

バイスタンダー効果が起こるわけではない。実際、倒れた人の近くにいる人が連携して救命に成功した事例も多数見受けられる。このような差異はどうして生み出されているのだろうか。

本稿は、過去に AED を使用して市民によって救命がなされた現場に関するデータを集め、救命に資する要因や条件を探索する。具体的には、AED 使用による救命成功が行われたときに、どのような状況で、どのような人が、どのように救命活動を実行したのかという実際の救命現場のデータを、新聞記事とアンケートデータを併用し、分析する。

2. 方法論

本研究は、新聞記事分析とアンケート調査が行われた。各調査の手続きについては以下のとおりである。

2.1. 新聞記事分析

AED を用いた救命活動が具体的にどう行われたのかを確認するために、新聞記事から情報を収集した。その方法については以下の通りである。

- (1) 朝日新聞の記事を 2013 年 1 月 1 日より 2023 年 12 月 31 日までの 10 年間分の中から、「AED」という言葉を含む記事を抽出した。朝日新聞を選んだ理由は、他紙に比べ AED に関する記事の掲載頻度が最も多く、地域も網羅しているからである。
- (2) 朝日新聞クロスサーチで、記事のタイトルから、AED を用いて救命された事例を抽出した。具体的には最初に「AED」というキーワードで記事を抽出した。抽出された記事の中には、AED の啓発に関する記事、AED の訓練の報告記事、AED によって救命されなかったことに対する裁判記事など、様々な内容が含まれていたため、記事の一つ一つを確認し、「AED を用いて救命活動が行われた事例（それに対する表彰などを含む）」を扱った記事だけを抽出した。その結果、2013 年から 2023 年までの 10 年間で 103 の記事が抽出された。
- (3) それぞれに記事内容から、①救命が起きた場所、②被救命者の特性（性別、年齢）、③救命に関わった人数、④救命に関わった人の特徴、⑤（救命者が複数であった場合）チームの組成のされ方、を收拾しデータを集め、分析をした。

2.2 アンケート調査

新聞記事分析に基づいた調査票を作成し、以下のとおりアンケートを実施した。

- (1) 調査目的：AED の認知と利用に関するアンケート調査
- (2) 調査対象：GMO リサーチ登録者 2244 人
- (3) 回収期間：2024 年 3 月 5 日～6 日
- (4) 実施方法：オンライン調査サービス、Questant を活用したアンケート調査

3. 新聞記事分析の結果

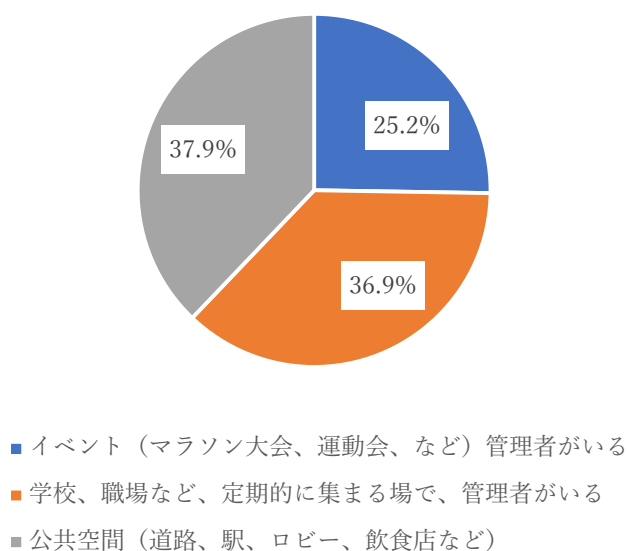
3.1 救命状況の概要

(1) 救命行為が行われた場所

第一に救命行為が行われた場所についてである。総務省消防局が発表した令和4年中に救急搬送された心肺機能停止傷病者を事故発生場所の割合を見ると、住宅で発生した割合が66.8%（9万5,379人）で半数を超えており、続いて公衆出入場所が23.4%（3万3,404人）、仕事場2,428人1.7%、道路4.2%（5,977人）となっている（総務省消防庁、令和5年版 救急救助の現況 p.85）。

これに対し、新聞記事では住宅で発生した事例は扱われておらず、イベント、学校、職場、公共空間等がほとんどであることがわかる（図1）。新聞記事にする以上、住宅内の事例は取り上げにくいこと、ニュース性の乏しいことなどが理由であると考えられる。

図1. 救命があった場所（n=103）



(2) 被救命者の属性

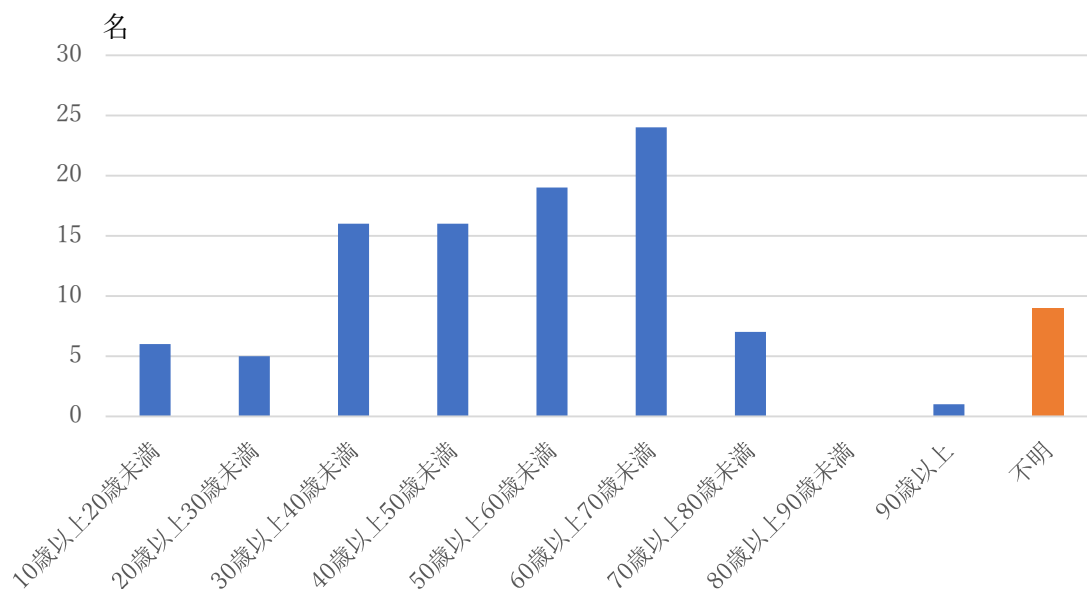
①年齢分布

新聞記事で取り上げられた救命された人（被救命者）の属性についてみていこう。まず年齢であるが、60台が最も多く、次いで50台、さらに30台、40台が続く（図2）。これを総務省消防庁が令和4年に発表した統計と比較してみると、消防庁のデータでは、心肺機能停止傷病者の年齢区分をみると80台が最も多く、次いで70台、90台となる。よって本調査で抽出された事例は、全体の中でやや若い年齢層であることがわかる。

これは新聞で取り上げられた事例は、公共の場で行われる救命行為であり、さらに救命

に成功した事例であることに起因するであろう。80台、90台の高齢者は頻繁に外出せず、倒れた場所が家の中であるが多いため、新聞記事に取り上げられにくいと推察される。また救命行為の結果、80台、90台の生存率は60代よりは低いため、救命に成功した事例として新聞記事に取り上げられることが少ないものと推察される。

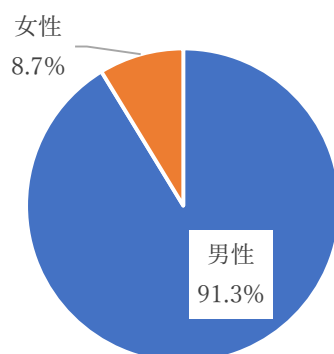
図2. 被救命者の年齢構成 (n=94、不明9名)



②被救命者の性別

次に被救命者の性別についてみていく。新聞記事で取り上げられた記事における被救命者は、圧倒的に男性が多く、91.3%が男性である。女性は9事例、8.7%にとどまっている(図3)。

図3. 被救命者の性別 (n=103)



総務省消防庁が発表した令和4年中に救急搬送された心肺機能停止傷病者の男女別の割合をみると男性は57.4%、女性は42.6%であり、男性の比率がやや高いものの被救命者と

して女性の比率は半数弱を占めている（総務省消防庁、2024）。この数字と比較すると、図3のデータは偏りがあると思わざるを得ない。

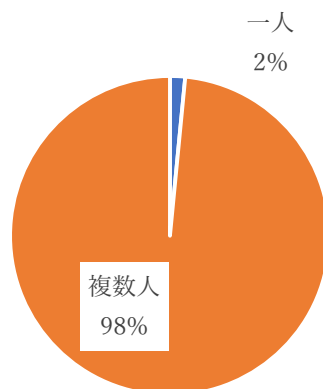
新聞記事で取り上げられた記事のうち、被救命者が女性である比率がここまで低い理由は、新聞記事で取り上げられるのは公共の場で行われた救命であることや、救命成功の記事を取り上げていることと関係があると思われる。つまり女性が倒れる場所は高齢者と同様、屋内が多い傾向にあることや、また女性が公共の場でAEDを用いて蘇生されるのは憚られ救命につながっていない、といった理由が推測される。この点は精査すべき論点である。

（3）救命活動の状況

①救命者の数

翻って今度は救命者に目を向けたい。新聞記事に掲載された救命に成功した事例では、ほとんど救命者は複数であった。ちなみに新聞記事では名前は一人だけしか挙がっていないが、当時の状況の描写から周囲の人の援助を受けたことが記載されていると判断された事例は「複数人」に分類した。一人が主導して救命を全て行った（ように書かれている）事例はわずか2事例にとどまっていた。

図4 救命者の人数（一人か、複数か）（n=103）

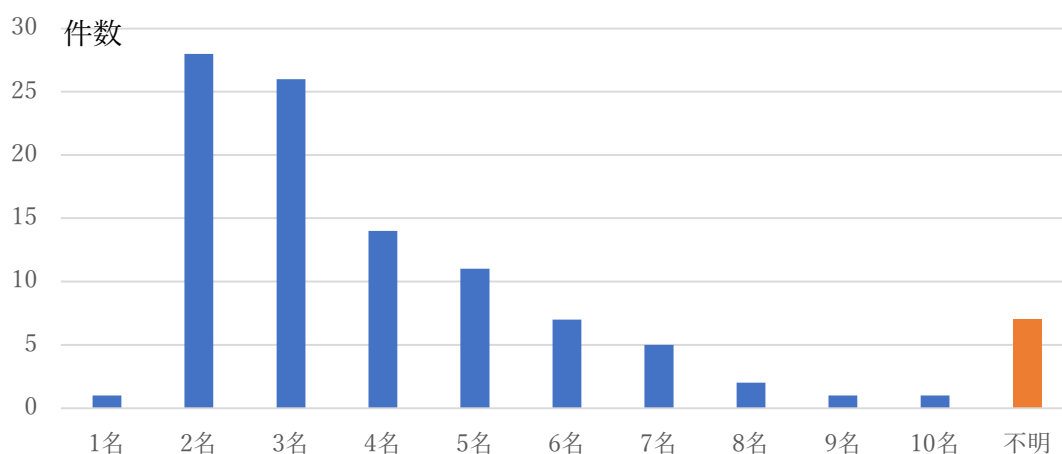


②救命者数の分布（複数人のみ）

救命者が複数である場合、何名が救助に関わったのであろうか。人数の比率を図5に示す。ちなみに救命者数は新聞記事によっては書き方に違いがあり、人数が特定できないものは、記事の内容から判断した。その際、「2名以上」は「2名」、「3名以上」は「3名」として分類している。また実際に救命に関わったが記事で触れられていない人は、救命者人数にカウントしていない。よって実際の救命者数はやや少なめになっている可能性が高い。それらを考慮したうえで図5をみると、最も多い救命者数は2名、続いて3名であり、人数が増えるにつれ減少していつている。

また救命行為は複数にわたる場合、AED の使用前に、①人を呼ぶ、②119 に電話をかける、③AED をとってくる、④心臓マッサージを行う、⑤人工呼吸を行う、⑥救急車が停車する場所の確保、といった役割を、救命者間で分担して行っていた。特に心臓マッサージは複数名で行われる事例が多かった。これは救急車が来るまでの時間、1 分間 100 回のペースで胸部を押し続けるのはかなりのエネルギーを要するからであると思われる。

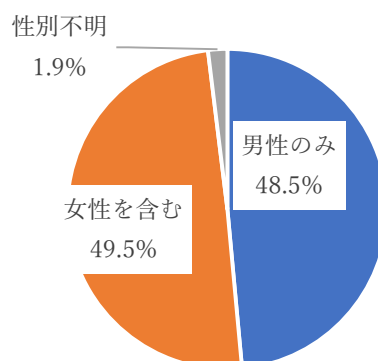
図 5. 救命者数の分布 (n=96、不明 7)



③救命者の構成 (性別)

次に救命者の性別をみる。これは「男性のみ」と、「女性を含む」に分類した（職業名しか記載されていない、また名前から性別が識別できない事例もあるため女性だけのうカテゴリーは作れなかった）。図 6 によると、男性のみの救命が 48.5%、女性を含む救命は 49.5%である。被救命者は男性が圧倒的に多いが、救命者は女性が半分であることがわかる。女性は救命されることが少なくとも、救命活動には積極的にかかわっていることがわかる。

図 6 救命者の性別 (n=103)



④性別による救命者と被救命者の組み合わせ

図5と図6の、救命者と被救命者を性別の組み合わせたものが表1のとおりである。被救命者については圧倒的に男性が多く94件で、女性は9件に過ぎなかった。しかし救命者として男性の比率は多く、男性だけの救命は全体の48.5%であるのに対し、女性は全体の49.5%の救命事例に関わっており、中には女性だけの救命者が救助活動をした事例も数例あった。とりわけ被救命者が女性である場合、2件を除く7件（女性に対する救命の77.8%）では女性が救命者に入っていた。

異性に対する救命、とりわけ男性の女性に対する救命行為は躊躇される傾向にあることが推察される。他方で、救命者に女性が入っていると救命率が上がる可能性があることが推察される。

表1. 救命者と被救命者の組み合わせ

		救命者			総計
		女性含まない (男性のみ)	女性含む	不明	
被救命者	男性	48 (46.6%)	44 (42.7%)	2 (1.9%)	94 (91.3%)
	女性	2 (1.9%)	7 (6.8%)	0 (0%)	9 (8.7%)
	事例総数	50 (48.5%)	51 (49.5%)	2 (1.9%)	103 (100%)

(4) 救命者の組み合わせ

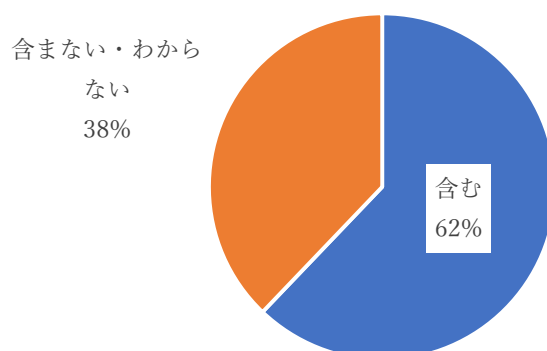
次に救命者同士の関係について分析してみる。救命を行いやすい救命者の関係性があるのかどうかを確認する。

①救命者が複数である場合、その中に知り合いが含まれているか

救命者が複数である場合、その中に知り合いが含まれているかどうかという点である。これは、知り合いが一緒であるほうが救命行為を行うときに心強く、またコミュニケーションも円滑に行われるので、救命行為をしやすいという仮説に基づいている。

抽出された新聞記事によると、知り合いが含まれている救命行為のほうが62%と多いものの、38%は知り合いではない人との救命行為が行われていたことが示されている（図7）。

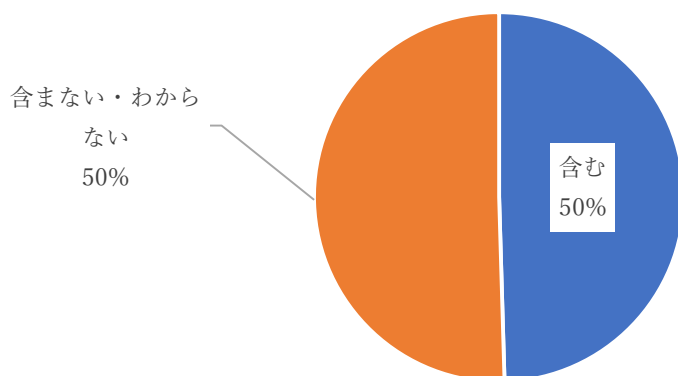
図 7. 救命者が複数である場合、その中に知り合いが含まれているか(n=101)



②救命者が複数である場合、倒れた場所の管理者が含まれていたか

次に、救助者が複数いる場合、倒れた場所の管理者が含まれているかどうかをみた。スポーツ施設、駅、会社など管理者がいる場所で倒れた場合、管理者が主導して救助活動を行うのではないかとという仮説である。ちなみに調査した事例の半分は、管理者がいる場所での救命行為である（図 1）。図 8 によると救命者に管理者が含まれているのは半分程度で、必ずしもその場の管理者が救助者に含まれるとは限らないことが示された。これは管理者に頼らない救命行為が行われ、それが救命の成果の引き上げに貢献している可能性を示唆している。

図 8 救命者が複数おり、その中に倒れた場所の管理者が含まれている(n=101)



④救命者が複数である場合、その中に AED 使用の知識を持つ人が含まれていたか

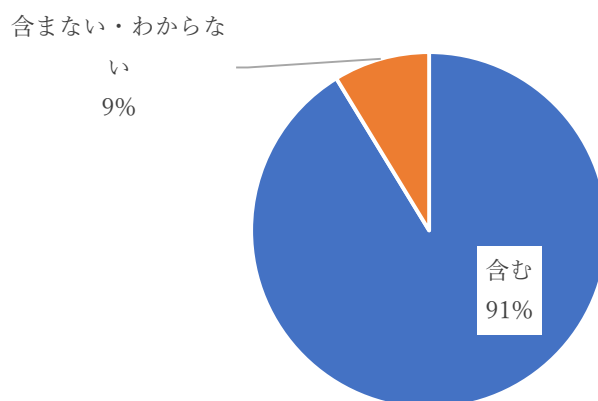
次に救命者は AED についての使用知識を有しているかどうかについてである。一般的に AED の使用法など救命に関する知識をもつ人のほうが、救命行為を行いやすいと思われる。救助者の中に、AED の扱い方について講習を受けたり、使用したことがあったりした人が

どれだけいたのでしょうか。

抽出された新聞記事の中で、職業上知識があることが必須であったり、救命者がAED講習を受けていたことや救命訓練をしていたりしたことが記載されていた場合、「救命者はAED使用の知識を持つ人を含まれていた」に分類した。逆にそのような記述がない事例は、「救命者にはAED使用の知識を持つ人が含まれていない」と分類した。この場合、AEDの使用知識を有していても単に確認がとれないだけの場合もあるので、やや数字が低めに出ている可能性がある。

図9によると、知識をもった人が救命した事例は全体91%であった。興味深いのはAED使用についての知識をもたない人しかいなくても9%の事例で心肺蘇生やAEDを使用した救命をおこなっているという点である。なかには、知識を持たない人が119に電話をし、消防士からの指示をうけながらAEDを使用した事例も見受けられた。

図9. 救命者が複数である場合、AED使用の知識を持つ人が含まれていたか (n=101)

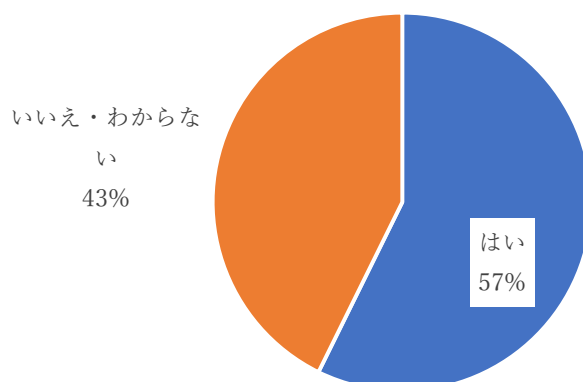


⑤救命者が複数である場合、救命者は偶然に出会った人たちによって組成されていたか

最後に、救命者が複数である場合、救命に関わった人々は、どのような経緯で救命活動に関わったのでしょうか。

新聞記事によると、これまで全く面識がなく偶然居合わせた人が、互いに連携を取りながら救命行為を行った事例が57%ある（救命者の中の何人かは知り合いであるが、知り合いでなかった人が含まれている場合は、偶然居合わせたものに分類した）。

図 10. 救命者が複数で救命者は偶然に出会った人たちによって組成されていたか (n=101)



偶然居合わせた人達が、即興的に役割分担をし、救命活動を行ったという事例が 57%あったことは興味深い。そのような場合、最初の救命者がリーダーシップをとって指示をした事例もあるが、現場に直面した人が自発的に自分の役割を見つけ（例えば、119 に連絡をする、AED を持ってくる、など）動いたという事例もあり、いくつかのタイプに分けられる。

成功する救命行為の中には、複数の人による行為の連鎖であり、見知らぬ人同士でも、救命という同じ目的のために、コミュニケーションを図りながら、貢献意欲をもって活動するものがある。それはバーナードが定義する「組織」の概念に近い (Barnard, 1968) 。それではなぜ見知らぬ人同士が組織を形成できたのであろうか。どういう条件がそこにあったのは、もっと深掘りする必要である。

3.2. 発見事項

新聞記事分析より、AED を用いて救命行為を行い成功した事例には、以下のような発見事項があった。

- (1) 被救命者は公の場で活動する 60 歳台、70 歳台の男性が多い
- (2) 被救命者は男性が圧倒的に多いが、救命者は男女ほぼ半分である
- (3) 救命行為のほとんどが複数で行われており、役割を分業しながら救命行為が行われていた
- (4) 救命行為は、その場に知り合いがいるほうが起こりやすいが、知り合いがいなくても生じることもある。
- (5) AED 使用に関する知識を持つものが救命行為を行う事例が大多数であるが、知識がないものが救命行為を行っていた事例も 1 割程度あった
- (6) その場で初めて出会った人が連携をして救命行為をする事例は 57%あった。

4 アンケート調査の結果

「AED の認知と利用に関するアンケート調査」というテーマで、一般市民にアンケート調査を行い、救命経験の有無、AED についての理解と使用経験、救命活動が行われた現場の状況、救命活動へどれくらい関与したか、また状況を想定してもらい救命活動への参加の程度について聞いた。アンケートは 2024 年 3 月 5 日から 6 日にわたって行われ、GMO リサーチ登録者 2,244 名から回答を得た。

4.1 救命状況の概要

(1) アンケート対象者と救命活動への関わり

アンケート対象者を、救命行動への関与によって 4 種類に分けた。「救命活動を主導したことがある」(28 名)、「救命活動に参加したことがある」(49 名)を、「救命経験者」(77 名)とした。他方で「救命現場を見たことがある」「救命されたことがある」「救命現場を見たことも経験したこともない」はそれぞれ 69 名、12 名、2085 名であったが、救命には関わらなかった人として「救命経験なし」と分類した

表 2 アンケート回答者と救命経験

	救命を 主導した ことが ある	救命に 参加した ことが ある	救命経験 あり総計	救命現 場をみ たこと がある	救命 された ことが ある	救命現を 見たこと も経験も なし	救命経験 なし総計
男性	23	39	62 (4.3%)	50	8	1314	1372 (95.7%)
女性	5	10	15 (1.85%)	19	4	772	795 (95.3%)
総計	28	49	77 (3.55%)	69	12	2086	2167 (92.3%)

(2) 被救命行為者の属性

①性別

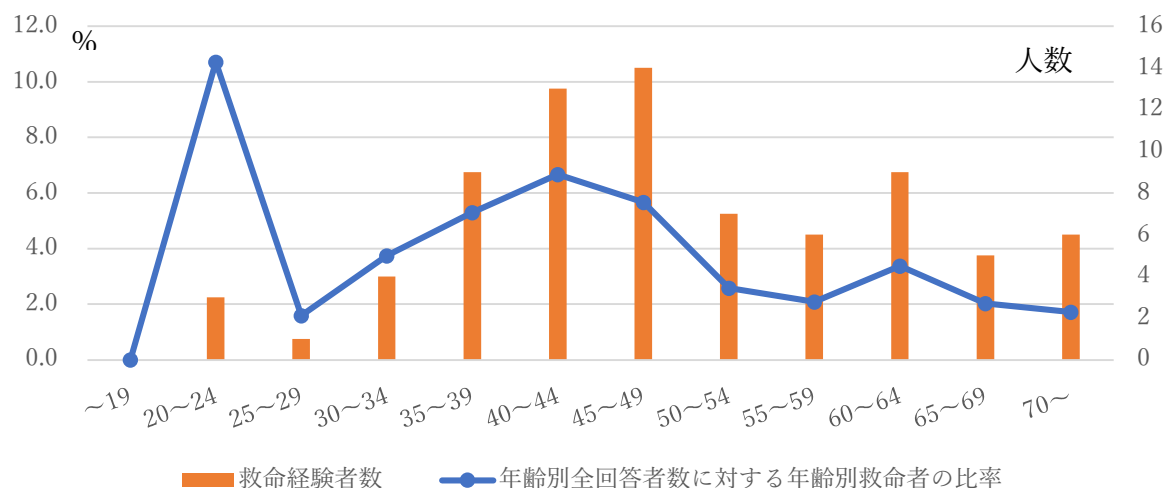
性別についてみると男性全体の中で救命行為を行った人は 62 名（男性回答者全体の 4.3%）であるのに対し、女性は 15 名（女性回答者全体 1.85%）であった（表 2）。本アンケートの回答者として女性が男性に比べ少なかったことに起因するかもしれないが、救命活動への参加比率は男性のほうが女性に比べ高かった。

②年齢

救命経験ありの 77 名の年齢構成をみると、40 台が圧倒的に多い。次いで 60 台前半と 30

台後半が続く。20 台前半はこの層の回答者数が少なかったため、比率が高くでている(図 11)。

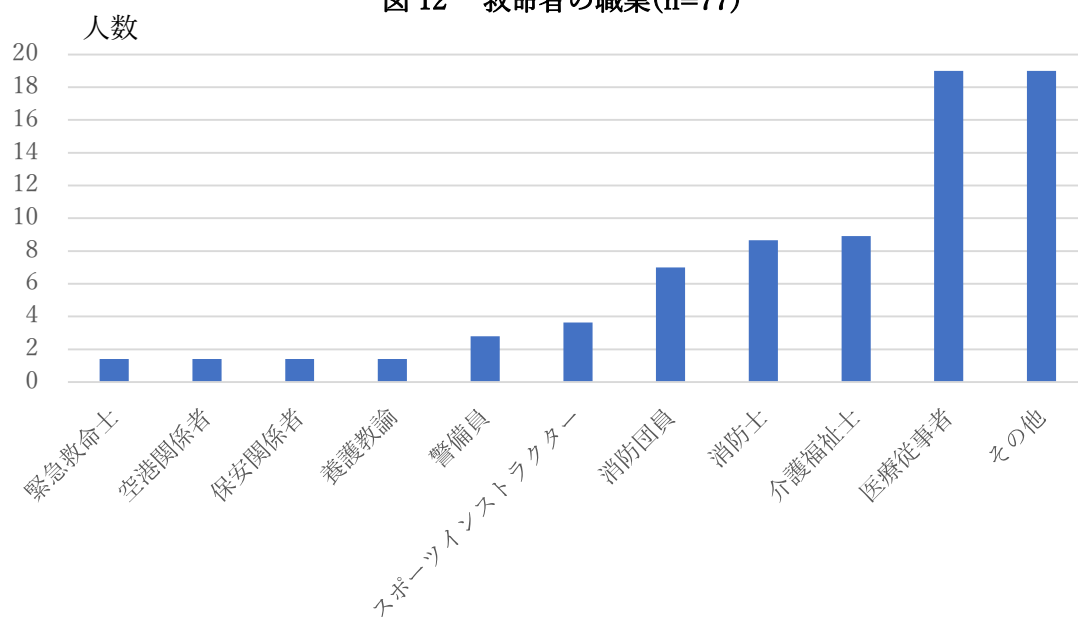
図 11 救命経験ありと回答した人の年齢構成と年齢ごとの比率 (n=77)



③救命者の職業

次に救命者の職業について聞いた。最も多いのが医療従事者（医師、看護師）、介護福祉士、消防士、消防団員などである。医療機関に勤めていたり、消防など救助活動を生業としていたりする人が多い(図 12)。

図 12 救命者の職業(n=77)

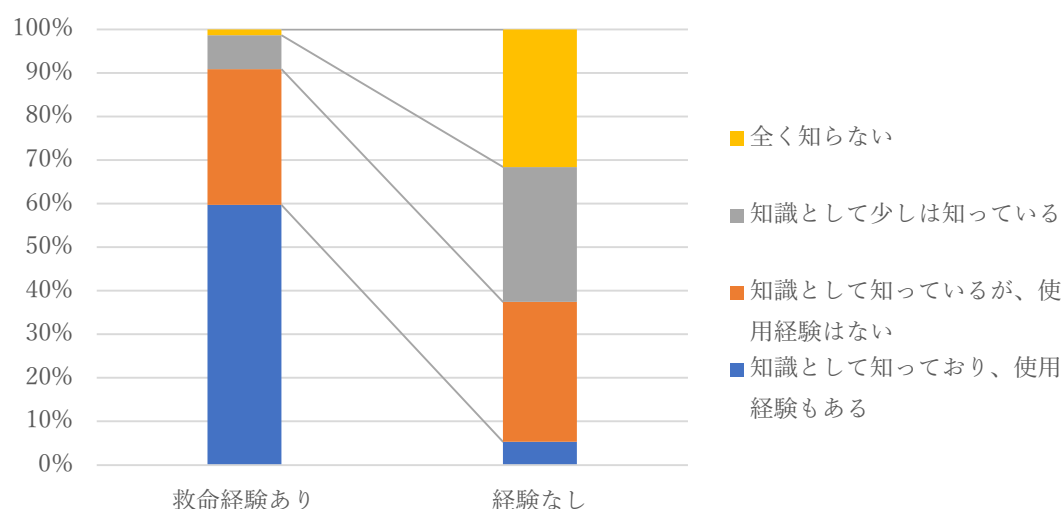


④救命行動と救命知識

次に救命行動をした 77 名の救命に関する知識の程度について聞いた。救命活動をした 77 名の約 9 割が救命に関する知識を持っていた。特に 77 名のうち 6 割が AED を使用した経験をもち、残りの 3 割も使用経験はないが救命知識をもっていた（図 13）。これは回答者の多くが医療従事者（医師、看護師）、介護福祉士、消防士、消防団員であることに起因していると思われる（図 12）。

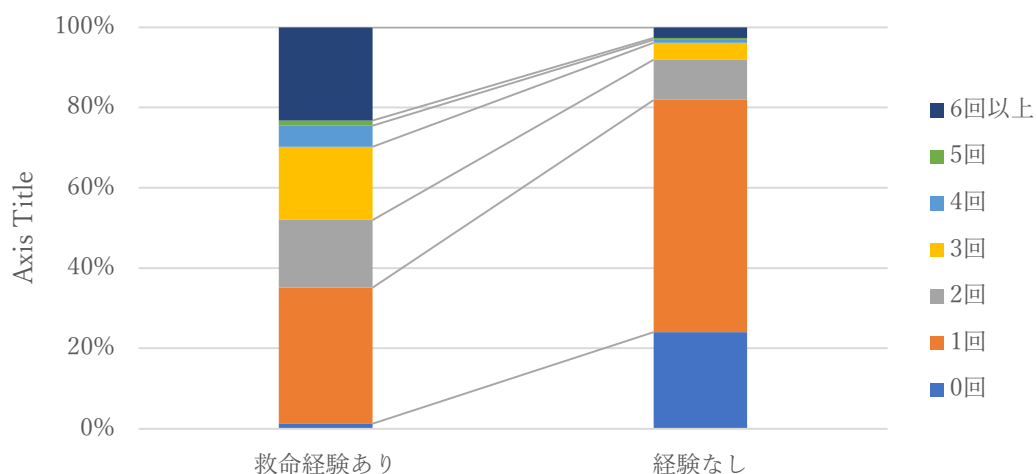
これを救命経験を全くもたないグループと比べると、その差は明らかである。救命経験を全く持たないグループで、AED を使用した経験があると答えた人の中には、「AED を使用して救命するのを見たことがある」（11 名）、「（自分が）使用されたことがある」（3 名）、「いずれのケースもない」（111 名）であった。これら AED を使用した経験がある人は、実際の救命活動ではない状況（例えば訓練など）で AED を使用した経験があると思われる。これらの人々は、これまで救命現場に直面していないだけで、もし直面した時には救命活動を行えることが期待される。他方で、「全く知らない」が 3 割、「知識として少しは知っている」人を含めると 6 割程度であった（図 13）。

図 13 救命経験と救命知識
(救命経験あり n=77、救命経験なし n=2167)



また救命者と無経験者との知識の差は、AED 講習への参加回数からも見てとれる。救命経験ありのグループは 1 人を除いて、AED 講習に全員最低 1 回は参加し、半数が 3 回以上、23%が 6 回以上参加している。他方、救命経験がないグループでは、AED 講習に参加したことがない人は 23%であり、1 回以下は 82%であった（図 14）。

図 14 AED 講習参加回数
(救命経験あり n=77、救命経験なし n=2167)



(2) 救命時の状況について

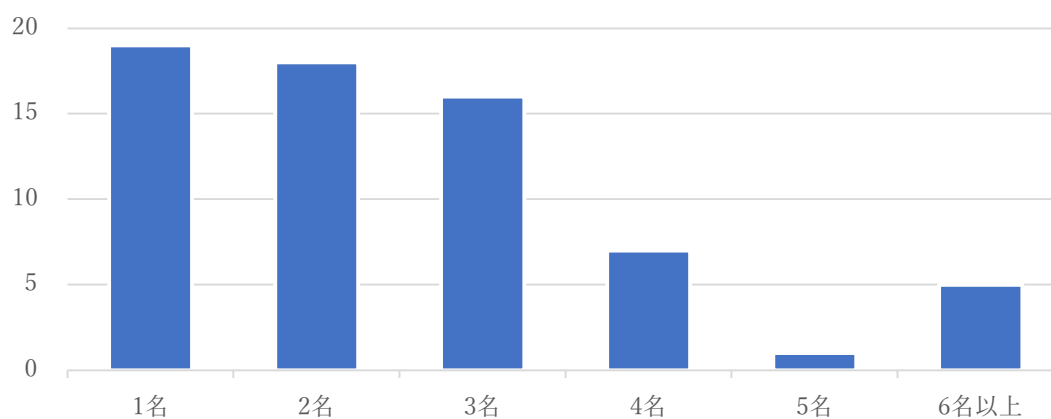
①救命者の人数

次に救命者 77 名に、救命時はどのような状況にあったのかを聞いた。まず何人で救命活動を行ったかである。77 名のうち、不明と答えたのが 11 名であり、残りの 66 名が回答者となった。

1 名で救助したと答えた人が 19 名(28.8%)で、2 名と答えたのは 18 名(27.2%)、3 名と答えたのは 16 名(24.2%)、4 名と答えたのは 7 名(10.6%)、5 名以上は 6 名(9%)であった。この数字から救命活動の約 7 割が複数名で救助したことがうかがえる(図 15)。

回答者の多くが医療従事者(医師、看護師)、介護福祉士、消防士、消防団員であることから、1 名で対応できる人数は普通より高めであると推測される(図 12)。

図 15 救命時の救命者数ごとの事例数 (n=66, 不明 11)
救命事例数



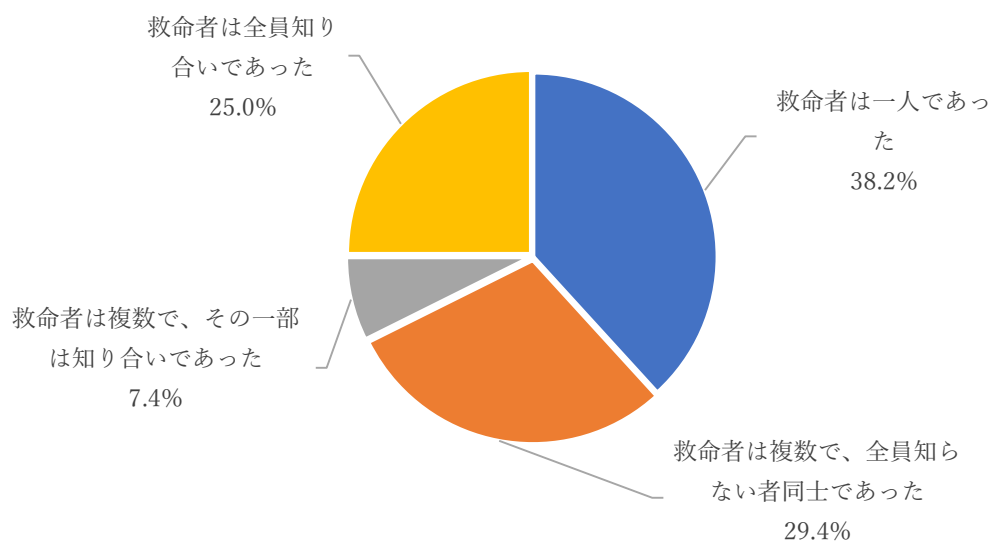
②救命者同士の関係

次に救助者間の関係について聞いた。この問いについて「不明」とこたえたが9名であり、残りの68名が回答者となった。救命者は「一人」と答えたのは38%、次に「複数で知らない者同士」という回答が30%、「複数で知らない者同士であったが一部は知り合いであった」というのが7%、「全員知り合いである」と答えたのは25%であった（図16）。

救命活動が行われた場所にもよるが、36.8%の事例で、「知らない者同士」あるいは「一部知らない者同士」で救命活動が行われていた（図16）。つまり誰かが目の前で突然倒れたとき、知らない人同士でその場で即興的な救命活動が組織化されていたということになる。

また救命者は「1名であった」という答えた人は、おそらく複数の人間がその場に居合わせても、実際に心臓マッサージやAED使用に手を下した人が一人であったことを意味しているのかもしれない。このデータの解釈は注意を要する。

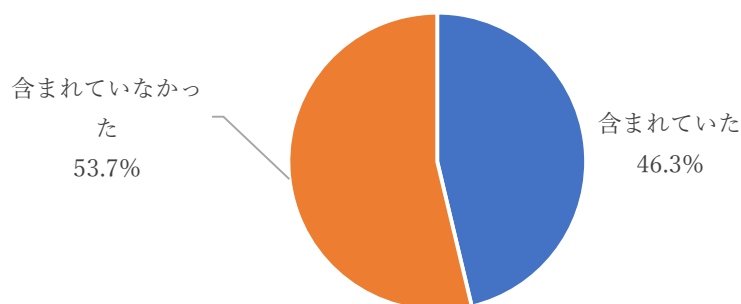
図16 救命者同士の関係（n=68, 不明9）



③救命者の中の女性の比率

救命者の中に女性が含まれていた比率を聞いたところ、46%とおおよそ半数であった（図17）。被救命者の性別は聞かなかったのだからわからないが、救命者として男性と同等に、女性も何らかの役割を担っていたことがうかがわれる。

図 17 救命者に女性が含まれていた比率 (n=67,不明 10)



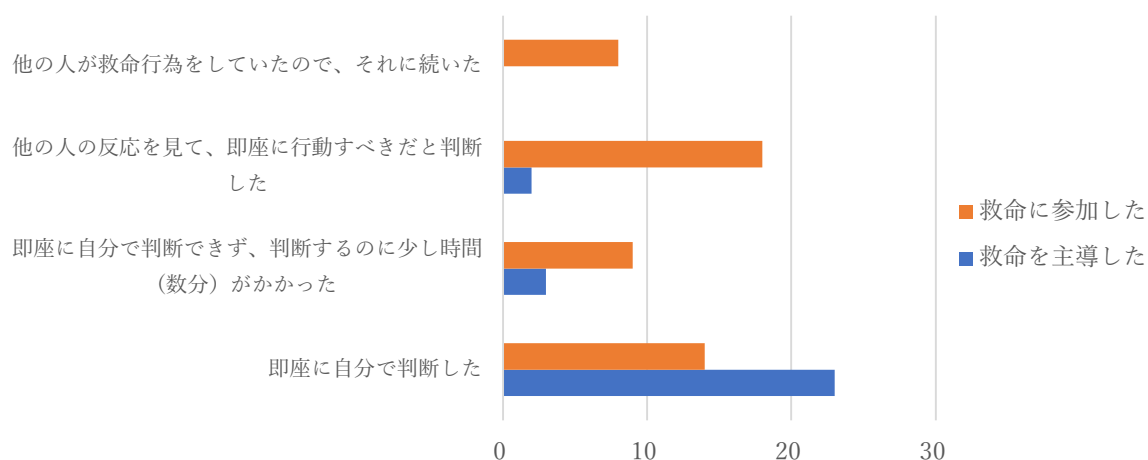
④救命時の意思決定について

次に救命時の意思決定について聞いた。救命の現場は突然発生し、その状況は多様かつカオス状態にあるため、そもそも救命すべきかどうかをその場で判断するのは難しい（ラタネ et al. 1977）。そのような複雑な状況にあって、ためらいもせずに支援を行えた人は、どのようにして意思決定を行ったのであろうか。

図 18 によると、救命者の中で、「救命を主導した人」は、即座に判断あるいは数分で判断し自発的に動いたことがわかる。「参加をした人」は、他の人（おそらく主導した人）の行動を見て状況を把握し動いた人が多いことがわかる。

救命活動を複数で行う場合、最初に動き出す人と、それに追従する人がいる。最初に動き出す人には救命に関する知識が豊富な人が多く、ある程度自信があると思われる。他方で救命に至るには、その人だけではなく、それに救命活動に協力する人が追従することが重要であると思われる。

図 18 救命時の意思決定 (%)
(救命を主導した n=28、救命活動に参加したことがある n=49)



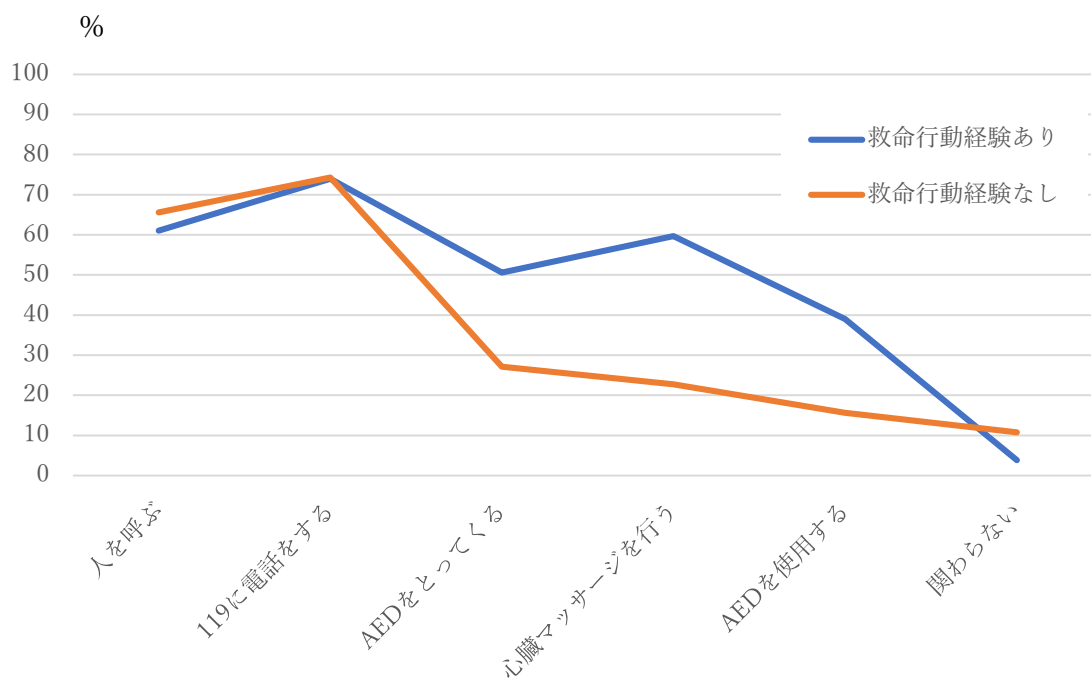
(3) 救命行動経験と実行可能な救命行動

ここからは過去の救命活動ではなく、特定の状況を想定し、どの程度までの救命活動ができるのかを全回答者に聞いた（救命経験あり 77 名、救命経験なし 2167 名）。複数の状況での反応をみるため、いくつかの状況での被験者の回答を求めた。今回は「路上、公園など公共の場で、周囲に人はいるが、知り合いはいない」という状況についてのデータを示す。

救命行動の段階を、①人を呼ぶ、②119 に電話をする、③AED をとってくる、④心臓マッサージを行う、⑤AED を使用する、の 5 段階に分け、アンケート対象者に対して、どの行動を起こせるのか、起こせる行動すべてを答えてもらった。

その結果は図 19 のとおりである。①人を呼ぶ（救命経験あり 65.6%、なし 65.6%）、②119 に電話をする（あり 74%、なし 74.3%）の段階では、救命行動経験者とそうでない人との差はほとんどなかった。しかし③AED をとってくる（あり 50.6%、なし 27.1%）、④心臓マッサージをする（58.7%、22.7%）、⑤AED を使用する（あり 39%、なし 15.6%）という直接的な救命行動に入ると、両者の差は大きく広がった（図 20）。また、⑥関わらない、と答えた救命行動経験のない人の数は、救命行動経験がある人の三倍となった（図 19）。

図 19 路上、公園など公共の場で、周囲に人はいるが、知り合いはいない状況において、起こすことができると思われる救命行動（%）（複数回答）
（救命経験あり n=77、救命経験なし=2167）



これは救命の経験がないと直接的な救命行動はとりにくいが、人を呼んだり、119 に電話をしたりする、といった間接的な救命行動は、救命経験の有無にかかわらず、躊躇なくできることがわかる。

新聞記事分析やアンケート調査からも、救命行動の 7 割が複数で行われるという結果がでており、必ずしも全員が心臓マッサージや AED を使用しなくても、自分でできる範囲の救助行動をとれば、それが経験知識のある人の救命行動につながる可能性があることを示している。特に、複数の人の目の前で人が倒れたとき、AED の使用を思いつき、それをとってることができるかどうかは、その次の行動（心臓マッサージ、AED を使用する）につながるかどうかを決定する重要なポイントともいえる。

「AED をとってくる」という行為は、救命経験ありと救命経験なしの間で差が出てくる要因であるが、その理由として AED がどこにあるのかわからないということが考えられる。そこで AED の設置場所についての知識の有無について聞いてみた。

AED の設置場所として①自宅、②職場・学校、③最もよく行く店、④最もよく行く飲食店、⑤最もよく行くスポーツ施設、⑥最も行く娯楽施設、⑦最も行く公共施設をあげ、それぞれの場所について AED がどこに設置されているのか知っているかどうかを聞いた。

回答者全体でみると、AED の設置場所を全ての場所で知っているとした人は 48 名 (2.1%) いた。また全てではないが、いくつかの場所において AED の設置場所を答えられると回答した人は 1137 名 (50.7%)、どの場所でも AED の設置場所はわからないと答えたのは 1060 名 (47.2%) であった。場所別で見えてみると、職場や学校で AED の場所を知っていると答えた人が最も多く、続いて、よく行くお店、自宅、公共施設、スポーツ施設が続く。飲食店や娯楽施設の比率がやや低い。定期的に訪れる場所での AED 設置場所は認知されている傾向にある。

次に救命経験の有無で分けてみてみよう。比較をしたのが図 20 である。救命経験があるのほうが、圧倒的に AED の設置場所を知っている。具体的には、救命経験のある人 77 名のうち 12 名 (15.6%) は、どの場所でも AED の所在を知っていた。また 58 名は全部ではないが、いくつかの場所にある AED の所在を答えることができた。全ての場所において AED の所在がわからないと答えたのは 7 名 (9%) となった。救命経験のある人は、図 12 で示したように医療従事者（医師、看護師）、介護福祉士、消防士、消防団員などが多いため、職業柄、AED の場所を日ごろ確認していると推察される。

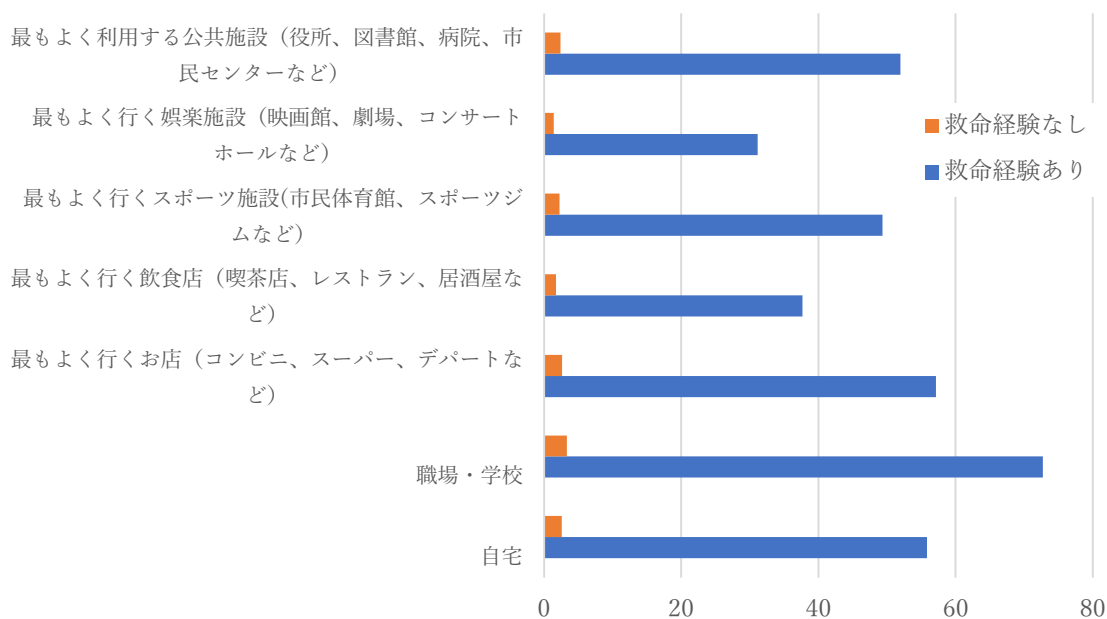
他方で救命経験がない 2,168 人中、36 名 (1.67%) がすべての場所で AED の設置場所を知っていると答えた。逆に全ての場所において AED の設置場所を知らないとした人は 1053 名 (48.6%) で約半数に上った。残りの 1079 名 (49.8%) はいくつかの場所で AED の設置場所を答えられると回答した。

救命の現場において、「AED をとってくる」という行為は、AED を使用した救命行動につながる重要なステップである。そのような行動が起こすためには、どこに AED があるのかを日ごろから意識しておく必要がある。また場所の管理者も AED を設置していることや

その場所を日ごろからサインを出しておくなどの配慮は必要であろう。

さらに約半数の人たちが AED の設置場所を知っていると答えており、たとえ一人の人が全ての場所の AED 設置場所を知らなくても、救命現場にいる人たちがその場で情報を出し合えば、AED の居場所がわかり、結果、使用につながる可能性が高まると思われる。

図 20 AED のある場所を知っている人の割合 (%)
(救命経験あり n=77、救命経験なし=2167)

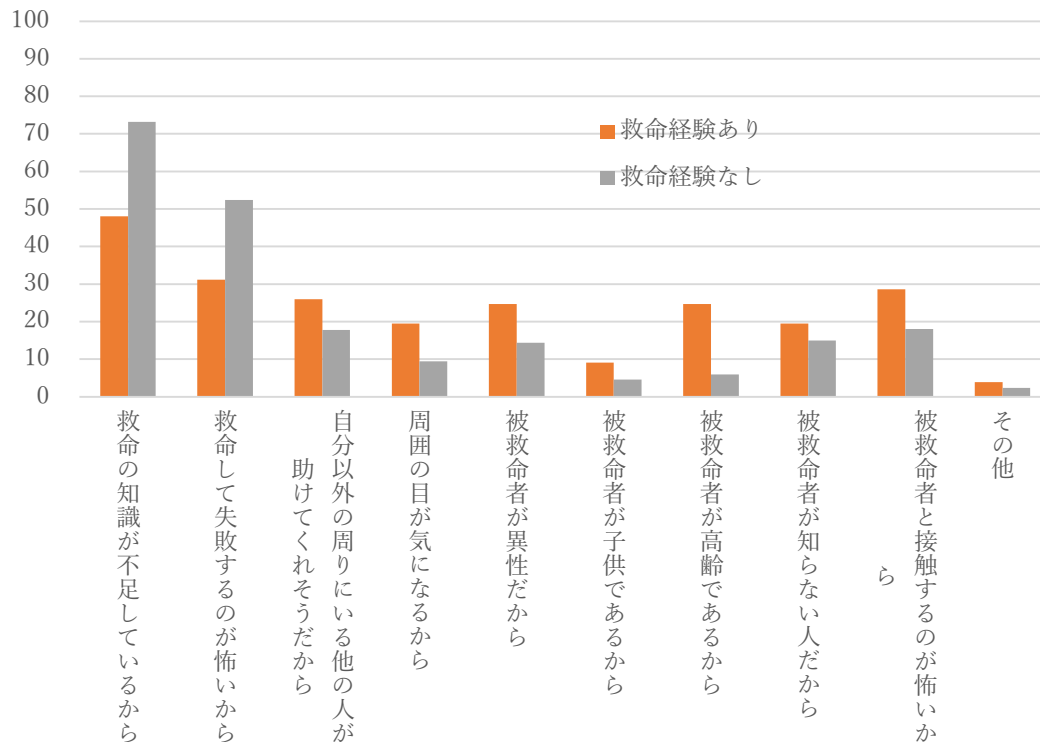


(4) 救命活動を躊躇させる理由について

目の前で人が倒れたとしても、救命活動を即座に行えるとは限らない。アンケートでは、救命活動を躊躇させる理由についても聞いた。その結果、救命経験のない人は、「(救命) 知識の不足」や、「救命をして失敗することへの恐れ」を理由として挙げる人が多かったのに対し、救命経験のある人は、「知識の不足」や「救命の失敗への恐れ」のみならず、救命時の周囲の状況や、被救命者の属性 (被救命者が異性、子供、高齢、知らない人など) を理由に挙げる比率が高かった (図 21)。

救命経験のある人は、救命の現場の具体的な状況を知っているからこそ、救命現場の状況で生じる出来事や感情を詳しく想像でき、それらを躊躇要因として回答したと推測する。また救命経験のある人ほど、救命者からの感染の可能性を指摘し、被救命者との接触に慎重であった。

図 21 救命活動を躊躇させる理由について (%) (複数回答)
(救命経験あり n=77、救命経験なし=2167)



(5) 救命に対する責任について

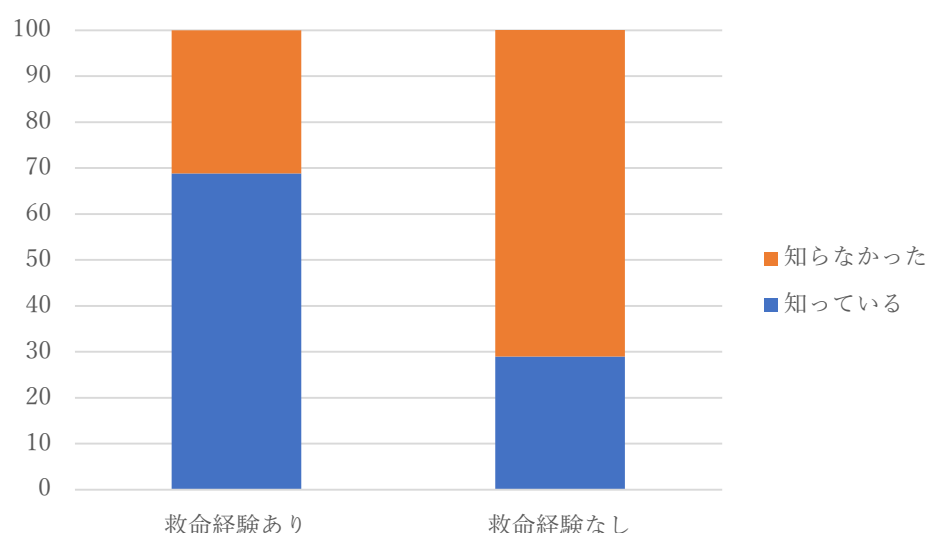
AED による救命にはリスクが伴う。たとえ救命行動をしたからといって救命に必ず成功するとは限らず、時に被救命者を死亡させてしまうことがある。しかし、たとえ被救命者が救命活動の結果死亡してしまっても、よほどのことをしなければ、救命者の責任は問われないという刑法・民法での法律がある⁷。そのことを知っているのかどうかを、救命経験の有無で分けて聞いてみた。

救命経験がある人のうち 7 割の人がこの法律を「知っていた」と回答したのに対し、救命経験なしは逆に 7 割が知らなかった (図 22)。救命経験のある人は、図 12 で示したように医療従事者 (医師、看護師)、介護福祉士、消防士、消防団員などが多いため、職業柄、このような知識を有していると推察される。救命経験のない人が救命活動を躊躇するのはこれら法律を知らないからという可能性がある。AED 講習では AED の使用法だけではな

⁷ 刑法第 37 条 (緊急避難時) 救命手当は、「社会的相当行為」として違法性を問われず、故意もしくは、重過失でなければ法的責任はない。および、民法第 698 条 (緊急事務管理) 悪意または重過失がない限り、善意で実施した救命手当の結果に救命手当の実施者が被災者などから責任を問われることはない。

く、法的責任が問われないことも周知すること、また AED 本体にも救命の法的責任について記載するなど、さらなる啓発活動が必要であると思われる。

図 22 救命時の法的責任についての知識の有無 (%)
(救命経験あり n=77, 救命経験なし n=2167)



4.2 発見事項

以上、アンケート調査では、救命経験がある回答者より、救命行動の現場で起こっていることについての知見を得た。救命経験がある人は、救命についての知識を積極的に学んでいることがわかった。さらに救命行動が起こるとき、その 7 割が複数名によって行われており、その中には救命時に知りあいでない人も含まれる事例も含まれており、いわば即興的な連携プレーのように救助活動が行われている。

救命の現場での行動に着目してみると、救命経験がある人となない人で救命行動が分かれるのは、「AED をとってくる」段階である。その後の「心臓マッサージを行う」、「AED を使用する」という被救命者に直接的に接触する救命段階では救命経験の有無によって大きな差がでた。他方でその前段階である、「人を呼ぶ」、「119 に連絡をする」については、救命知識や経験がない人でも救命経験者と同程度に行う意思があることがわかった。

分岐点となった「AED をとってくる」という行動であるが、AED をとってくるためには AED の居場所についての知識が必要である。それがあつた人のほうが AED を取りに動く可能性が高い。実際、救命経験のある人は AED の設置場所を知っている頻度が高く、救命経験のない人は AED の設置場所を全く知らない人が多い。もしより多くの人が AED の設置場所を日ごろ意識しておけば、いざというときに AED をとってくるという行動をとりやすくなり、AED 使用による救命活動まで進む可能性が高くなる可能性がある。そのような活動を促進するためには日ごろから AED の設置場所について知っておくことが必要である

う。

また救命活動を躊躇させるものとして、知識不足だけの問題ではなく、被救命者の属性やAEDでの救命に対する法律的知識の有無も重要であることも明らかになった。後者は教育の仕方次第であるが、前者の被救命者の属性（特に異性）による救命回避の問題については、新聞記事分析の結果とも一致する結果であり、今後検討しなければならないと思われる。

5. 二つの調査からの発見事項

- (1) AED による救命活動は救命活動についての知識がある人が積極的に行う傾向がある
- (2) AED による救命活動によって救われる対象は男性である比率が圧倒的に高いが、救命者には女性が入っている確率はおよそ 50%である
- (3) AED による救命活動の多くが複数名で行われている。そのうちの約半数は全く知己のない人と連携して即興的に行われる
- (4) 救命活動の初期の段階（人を呼ぶ、119 に電話をする）については、救命経験の有無にかかわらず行う意思は高い。そのあとの段階（AED をとってくる、心臓マッサージを行う、AED を使用する）に入ると、救命経験の有無で差が出る
- (5) 救命経験者は AED をとってくることを積極的に行うが、それは AED の設置場所を知っているという理由による。
- (6) AED による被救命者の属性や周辺状況が、救命行動を躊躇させる場合がある。特に救命経験者であるほど、知識の不足だけではなく、救命時の状況からの影響を受けやすい
- (7) AED による救命活動の失敗について法的な責任がないことを、救命経験がない人の 7 割は知らない。

6. 本調査の限界と今後について

本調査は救命の現場をミクロレベルまで降りて分析しようという試みであった。AED を使用した救命現場についての公の情報源として、新聞記事は有用かつ豊富な情報を提供する。本調査ではまず新聞記事分析を行った。新聞記事分析からいつ、だれが、どのような状況で、どのように AED を使用して救命活動を行ったのかについて、概要をつかむには適している。

他方で、新聞記事に掲載されている記事はすべての AED による救命事例が取り上げられているわけではないし、記事にするかどうかは新聞社の恣意性に左右されるため、サンプルバイアスの可能性がある。他にも救命されなかった事例は含まれていないとか、救命の現場の状況は必ずしも正確に記述されていないかもしれないといったデータの信ぴょう

性についての問題もある。

このような問題を補完すべく行ったアンケート調査を行った。幸いこのアンケートで 77 名の救命活動経験者を見出すことができ、新聞記事分析で発見した事象を確認したり、新たな発見事項を見出したりすることができた。特に救命活動経験者とそうでない人との比から意味のある差を見いだせた。

他方、救命経験のある人の職業が医療従事者（医師、看護師）、介護福祉士、消防士、消防団員などが多く、救命者のサンプルバイアスがあるのではという批判はあるが、そもそも救命活動をそのような職業の人に依存しているというのが現在の日本の実情で、それがアンケートで明らかになったのではないであろうか。

今後、救命が行われた事例ではなく、救命が行われなかった（行えなかった）事例に目配りをしていく。救命がなされなかった事例のいくつかは裁判になっており、それらの判例は AED による救命が行われなかった現場の状況においてより豊かな示唆とヒントを与えてくれるであろう。

【参考文献】

- Barnard, C. I. (1968). *The functions of the executive* (Vol. 11). Harvard university press. (邦訳：『経営者の役割』(1968) 山本安二郎訳、ダイヤモンド社)
- 福嶋路, 河野英子, 大沼雅也, 竹内竜介, 青木成樹, & 高石光一. (2020). 警備会社による AED の普及: セコム株式会社の事例. *TMARG Discussion Papers*, 138, 1-24.
- 河野英子, 大沼雅也, 福嶋路, 竹内竜介, & 高石光一. (2019) 「日本光電工業: AED の開発・事業化プロセス」『一橋ビジネスレビュー』 66, 124-138.
- 河野英子, 福嶋路, 竹内竜介, & 大沼雅也. (2021). 「市民による除細動 (PAD)」の普及に向けた地域の取り組み: 三島市・尾張旭市の事例. *YNU ワーキング・ペーパー・シリーズ*, 339, 1-21.
- 河野英子, 大沼雅也, 竹内竜介, 福嶋路, & 高石光一. (2022). コンビニエンスストア設置を核とした「市民による除細動 (PAD)」普及の取り組み—那覇市の事例. *YNU ワーキング・ペーパー・シリーズ*, 346, 1-21.
- Latané, B., & Darley, J. M. (1969). Bystander" apathy". *American Scientist*, 57(2), 244-268.
- ラタネ, B., & ダーレー J. (1977) 『冷淡な傍観者』(邦訳: 竹村研一、杉崎和子)、ブレーン出版 (Darley, J. M. 1987, *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?* New York; Appleton.)
- 大沼雅也. (2017). 日本における AED 普及の幕開け (1): 航空会社による採用. *YNU ワーキングペーパー*, 328, 1-24.
- 大沼雅也. (2019). 日本における AED 普及の幕開け (2): 日本航空における導入と活用. *YNU ワーキングペーパー*, 332, 1-34.
- 総務省消防庁(2024) 『令和 5 年版 救急救助の現状』
- 竹内竜介, 河野英子, 福嶋路, & 大沼雅也. (2020). フィリップス・ジャパンによる AED 事業.

YNU ワーキング・ペーパー・シリーズ, 335, 1-25.

竹内竜介, 河野英子, 福嶋路, 大沼雅也, & 青木成樹. (2020). 横浜市における AED 普及の取り組み. YNU ワーキング・ペーパー・シリーズ, 337, 1-23.

竹内竜介、河野英子、福嶋路、大沼雅也(2021).日本における AED に関する教育内容の変遷－文部科学省検定済教科書中学校「保健体育」の分析－ YNU ワーキング・ペーパー・シリーズ, 340, 1-32

補足資料 1

新聞記事一覧			
朝日新聞クロスサーチ（2013 年 1 月～2023 年 12 月までの記事）から「AED による救命」に関する記事を抽出し、分析対象として以下の記事を検討した。			
記事番号	掲載日時	タイトル	備考
1	2013 年 1 月 30 日	「お礼を」恩人女性捜す 人工呼吸、名乗らず 去る 淀屋橋駅、心筋梗塞の男性【大阪】	
2	2013 年 2 月 22 日	A E D で救命、市職員を表彰 山口市消防本部 ／山口県	
3	2013 年 2 月 26 日	心肺停止の走者救い感謝状 愛媛のランナーに 東京マラソン ／東京都	記事番号 4 と同じ内容
4	2013 年 3 月 9 日	男性走者を救助、7 人にも感謝状 東京マラソ ン ／東京都	記事番号 3 と同じ内容
5	2013 年 6 月 4 日	授業中倒れ死亡、県が和解の方針 0 8 年狭山 工高で ／埼玉県	救命できなかった事例
6	2013 年 6 月 28 日	種誤飲、小 2 死亡 特別支援学級で給食中 札 幌 ／北海道	救命できなかった事例
7	2013 年 7 月 2 日	プールでおぼれた男児、一時意識不明 西宮、 東山台小 ／兵庫県	
8	2013 年 9 月 25 日	心臓マッサージで救助貢献、県職員を知事表彰 「研修の内容いかせた」 ／福岡県	
9	2013 年 10 月 4 日	A E D を使えば助かった 両親、損害求め提訴 長岡市小学校の男児死亡事故 ／新潟県	救命できなかった事例
10	2013 年 10 月 9 日	歩道に倒れた人が…A E D で男性救助 南あわ じ・生垣さんに「のじぎく賞」 ／兵庫県	
11	2013 年 10 月 17 日	夜通し救助懸命 「がんばれ」声かけ 1 2 時間 以上 台風 2 6 号、伊豆大島で土石流	救命できなかった事例
12	2013 年 10 月 31 日	倒れた乗客、車掌が命救う A E D 処置、息吹 き返す 地下鉄東山線の車内 ／愛知県	
13	2013 年 11 月 14 日	救命・詐欺被害防止に感謝状 豊田高専・寮生 が連携、心肺蘇生 ／愛知県	
14	2013 年 11 月 18 日	一命救った心臓マッサージ 小金井の寺岡さん に消防総監感謝状 ／東京都	
15	2014 年 1 月 30 日	A E D 賠償訴訟、遺族が意見陳述 ／新潟県	救命できなかった事例
16	2014 年 3 月 29 日	篠山市、沿道の看護師に感謝状 男性走者を救 助 ／兵庫県	
17	2014 年 4 月 3 日	「部活中に A E D 使わず死亡」と提訴 神奈川 の生徒の両親	救命できなかった事例
18	2014 年 4 月 16 日	A E D、命のリレー 協力して蘇生、半田の女 性ら表彰 ／愛知県	
19	2014 年 7 月 30 日	球場で人命救助 北九州市立高の波多野監督・ 審判の横田さん表彰 高校野球 ／福岡県	
20	2014 年 8 月 1 日	「A E D 使用遅れ死亡」と大体大側を提訴 ／ 大阪府	救命できなかった事例

21	2014 年 11 月 15 日	A E D「怖かったけど後悔しなかった」 桐蔭学園剣道部、仲間の部員救助／神奈川県	
22	2014 年 11 月 17 日	7 人連係、心停止から救命 愛西市消防、感謝 状贈る ／愛知県	
23	2014 年 11 月 26 日	「A E D使わずに高校生死亡」 県、1 5 0 0 万円払い和解へ ／神奈川県	救命できなかった事例
24	2014 年 12 月 18 日	ゴルフ場で倒れた仲間救命 幸田町消防、2 人 に感謝状 ／愛知県	
25	2014 年 12 月 27 日	A E D訴訟、和解が成立 県立高で使用法研修 へ ／神奈川県	救命できなかった事例
26	2015 年 1 月 21 日	「ロードレース」で男性心肺停止、命救った適 切救護 八千代市長、3 人を表彰／千葉県	
27	2015 年 1 月 28 日	萩市駅伝でランナー心肺停止、力を合わせ救命 7 人に感謝状贈る ／山口県	
28	2015 年 1 月 29 日	東京駅で急病人、命を救い感謝状 越生消防団 員 2 人に ／埼玉県	
29	2015 年 2 月 15 日	居酒屋で 5 0 代心肺停止、客らが連携で人命救 助 熊本市東消防署から表彰 ／熊本県	
30	2015 年 2 月 17 日	ランナー救命の 2 人、どこ？ 青梅マラソンゴ ール後、男性が心肺停止 ／東京都	
31	2015 年 4 月 18 日	「心肺停止だ」連携して救助 5 人に感謝状 ／北海道	
32	2015 年 5 月 9 日	剣道の稽古中に倒れた男性救護 大学生ら 2 人 表彰 ／和歌山県	
33	2015 年 5 月 13 日	素早い救命処置、3 人に感謝状 湖南広域消防 局北消防署 ／滋賀県	
34	2015 年 8 月 23 日	テニスコートの救命 A E Dで対応、感謝状 羽生 ／埼玉県	
35	2015 年 9 月 1 日	心肺停止の男性救命 ロードレース大会、三井 消防が感謝状 ／福岡県	
36	2015 年 9 月 6 日	A E D、命救う 祇園祭・山鉾巡行中に心肺停 止 「看護師です」素早い救護実る／京都 府	
37	2015 年 11 月 14 日	元球児、命救うファインプレー 沼田高OB 3 人、マッサージやA E D ／群馬県	
38	2015 年 12 月 15 日	心肺停止男性救い感謝状 ／北海道	
39	2015 年 12 月 16 日	A E Dを使い、同僚の命救う 男性 2 人に感謝 状 ／京都府	
40	2016 年 1 月 18 日	心臓マッサージ協力、店で倒れた男性救う 居 合わせた 4 人に感謝状 ／佐賀県	
41	2016 年 2 月 20 日	A E Dで救命、男女 4 人表彰 甲府地区消防本 部 ／山梨県	
42	2016 年 3 月 1 日	心肺停止に迅速救命 西鉄駅員や乗客に感謝状 ／福岡県	
43	2016 年 3 月 4 日	(声) 息子倒れてA E Dの威力を認識	
44	2016 年 4 月 20 日	スタジアム救急、甲府の金星 心肺停止の観客、	

		A E Dで蘇生	
45	2016 年 4 月 21 日	両親「A E D使わず息子死亡」 判決「教員、法的義務なし」 地裁支部 /新潟県	救命できなかった事例
46	2016 年 4 月 22 日	人命救助で3人に感謝状 野田市消防本部 /千葉県	
47	2016 年 6 月 10 日	救命キャディーさんらに感謝状 鎌ヶ谷、倒れた男性に心臓マッサージ /千葉県	
48	2016 年 7 月 30 日	安東小3児童に感謝状 心肺停止のランナー救助に協力 /静岡県	
49	2016 年 9 月 5 日	男児の命救った5人に感謝状 豊橋市消防本部 /愛知県	
50	2016 年 9 月 18 日	第三者交え対応調査へ 中3、体育の授業中倒れ死亡 学校、いったん報告書作成/大分県	救命できなかった事例
51	2016 年 9 月 21 日	6人連携、おぼれた男児救護 河佐峡管理事務所職員に感謝状 /広島県	
52	2016 年 11 月 9 日	A E D、必死の救命 和歌山の女性がフットサル中に /和歌山県	
53	2016 年 11 月 12 日	人命救助で葬祭会社に感謝状 /兵庫県	
54	2016 年 11 月 22 日	ゴルフプレー中の男性、心肺停止 5人タッグ「奇跡」の救命 胸圧迫、交代で/奈良県	
55	2016 年 12 月 27 日	「A E Dの準備が不適切」 「強歩」で死亡した生徒遺族が提訴 /埼玉県	救命できなかった事例
56	2016 年 12 月 27 日	死亡部員の両親、浪商学園と和解 大体大サッカー訴訟 /大阪府	救命できなかった事例
57	2017 年 2 月 15 日	3人の医師ランナー、レース中も救命処置 沖縄・石垣市長が感謝状 /福島県	
58	2017 年 3 月 24 日	セミナー中、心肺停止の男性救護 看護師の女性ら6人に感謝状 /東京都	
59	2017 年 3 月 25 日	「強歩」高2死亡、県側は争う姿勢 第1回口頭弁論 /埼玉県	救命できなかった事例
60	2017 年 3 月 28 日	連係しA E D、心肺停止の女性救う 中津川消防、5人に感謝状 /岐阜県	
61	2017 年 4 月 21 日	人命救助で男性らに感謝状 /千葉県	
62	2017 年 4 月 29 日	救命活動をした3人に表彰状 /千葉県	
63	2017 年 6 月 8 日	野球部練習中、中2倒れ死亡 金沢 【大阪】	救命できなかった事例
64	2017 年 7 月 17 日	A E Dで救命、感謝状 /千葉県	
65	2017 年 7 月 22 日	A E D賠償訴訟、両親の控訴棄却 東京高裁 /新潟県	救命できなかった事例
66	2017 年 7 月 6 日	命救われた男性、A E D体験語る きょう山口 /山口県	救命状況についての内容が乏しい
67	2017 年 8 月 16 日	(探究 にいがた) A E D使っていたら 加茂 暁星高・野球部マネージャー死亡 /新潟県	救命できなかった事例
68	2017 年 9 月 6 日	客が連携、A E Dで救命 小倉北のゴルフ練習場で6月、客が心肺停止に /福岡県	

69	2017 年 9 月 7 日	4 教諭、連携して同僚救命 三田祥雲館高、AED 使用 / 兵庫県	
70	2017 年 10 月 13 日	パチンコ店員に救命感謝状 / 千葉県	
71	2017 年 10 月 19 日	高田高教諭 7 人、救命活動に尽力 消防署が感謝状 / 奈良県	
72	2017 年 11 月 30 日	保育所女児死亡、来年 3 月に判決 損害賠償訴訟が結審 / 山口県	救命できなかった事例
73	2017 年 12 月 3 日	ライフセーバー、訓練の成果披露 片男波海水浴場 / 和歌山県	AED 訓練の話
74	2018 年 1 月 28 日	審判員が突然倒れた！ 応援の父母、救命連係プレー 春日部市消防から感謝状 / 埼玉県	
75	2018 年 1 月 31 日	人命救助で感謝状 / 千葉県	
76	2018 年 2 月 2 日	ゴルフ場の 8 人、救命プレー 糸島で 11 月、心肺停止の男性に AED など連係 / 福岡県	
77	2018 年 2 月 12 日	ゴール目前で一時心肺停止 姫路城マラソン / 兵庫県	
78	2018 年 2 月 23 日	AED 賠償訴訟、両親の敗訴確定 / 新潟県	救命できなかった事例
79	2018 年 6 月 18 日	「鳥取マラソン 2018」ランナー救う、男性 2 人に感謝状 / 鳥取県	
80	2018 年 7 月 19 日	局長の命を救う、自衛官に感謝状 築上の郵便局で心臓マッサージ / 福岡県	
81	2018 年 9 月 21 日	適切な措置、救った命 路上で突然、心肺停止「強く胸骨圧迫」知識生きた / 大阪府	
82	2018 年 10 月 30 日	調理師らが連携、AED 使い救命 神戸市が表彰 / 兵庫県	
83	2018 年 12 月 15 日	AED 遅れで死亡と認めず 大宮高「強歩」、遺族の訴え棄却 / 埼玉県	救命できなかった事例
84	2018 年 12 月 31 日	42 歳男性が心肺停止、医師夫妻が救命措置 伊佐湧水消防から感謝状 / 鹿児島県	記事番号 85 と同じ内容
85	2019 年 1 月 9 日	運動会で救命、医師夫妻表彰 久留米大病院・堀之内さん、帰省先の鹿児島で / 福岡県	記事番号 84 と同じ内容
86	2019 年 1 月 11 日	卓球大会中に救命、連携 6 人に感謝状 豊前の広域消防本部 / 福岡県	
87	2019 年 1 月 17 日	AED で命救う 3 男性に感謝状 鈴鹿市消防本部 / 三重県	
88	2019 年 8 月 27 日	迅速対応で救命、感謝状贈る 静岡市消防局、ソフトボール 2 チームに / 静岡県	
89	2019 年 8 月 31 日	仲間と連携、AED で命救う 鈴鹿、シニア体操クラブ 6 人に感謝状 / 三重県	
90	2019 年 9 月 7 日	中学生と 3 教諭、連係で人命救助 松戸市消防局が感謝状 / 千葉県	
91	2019 年 10 月 1 日	思いやり、命救った運動会 鬼怒川小、保護者倒れ中断→蘇生し翌日再開 / 栃木県	
92	2019 年 10 月 2 日	(人ひとひと) 心肺蘇生で男性を救う・栗田昂稀さん / 千葉県	
93	2019 年 12 月 13 日	倒れた人、すぐ蘇生措置、看護師ら救命 長崎	

		のスポーツ施設、消防が感謝状／長崎県	
94	2019 年 12 月 21 日	A E Dで命のリレー、男性救助 テニススクールの4人 熊本市東消防署、表彰／熊本県	
95	2020 年 2 月 29 日	人命救助に協力、市民らに感謝状 名張市消防本部 ／三重県	
96	2020 年 5 月 13 日	(声をたどって) コロナ気にせず助けてくれたラーメン屋で倒れた私、介抱に感謝【名古屋】	救命時の情報の内容が乏しい
97	2020 年 6 月 22 日	女性5人、必死の救助 下京消防署が感謝状 路上で突然、男性意識不明 ／京都府	
98	2020 年 7 月 22 日	(朝デジから) 巨人コーチ、悲劇教訓に救命 10年前に仲間急死、毎年A E D受講	
99	2020 年 9 月 16 日	税務署職員が救命措置 藤枝、消防本部が感謝状 ／静岡県	
100	2020 年 9 月 25 日	マッサージとA E D、連係の救命に感謝状 習志野市消防、男性2人とこども園に／千葉県	
101	2020 年 10 月 21 日	5人で連係、人命救う 諫早消防署が感謝状 ／長崎県	
102	2020 年 11 月 5 日	登山客が心肺停止、救命リレー 高尾山、八王子消防署が感謝状 ／東京都	
103	2020 年 11 月 10 日	連係し心肺停止の児童救助 江南小の教員6人に感謝状 毎年A E D 使用の訓練を実施／宮崎県	記事番号 104 と同じ内容
104	2020 年 11 月 12 日	教室で救命、生きた「練習」 教員6人、瞬時に「動いた」 宮崎、児童が心肺停止／宮崎県	記事番号 103 と同じ内容
105	2020 年 11 月 27 日	帰宅中、列車内で人命救助 越谷の看護師に感謝状 ／埼玉県	
106	2020 年 12 月 3 日	テストに出た！A E Dで救命 西陵高剣道部員らに感謝状 ／長崎県	
107	2021 年 1 月 3 日	稽古後心肺停止、仲間2人が救う 岐阜市消防本部が感謝状 ／岐阜県	
108	2021 年 1 月 30 日	先生の連係プレーで救命、動画に反響 宮崎・江南小「15分間の奇跡」 ／宮崎県	AED 啓発記事
109	2021 年 2 月 13 日	心肺停止、連係で救助 宮崎市・IT企業に感謝状 ／宮崎県	
110	2021 年 4 月 22 日	心肺停止の女性、元看護師が救命 東広島市消防局感謝状 ／広島県	
111	2021 年 5 月 20 日	倒れた客、A E D救命 越谷の銀行支店に感謝状 ／埼玉県	
112	2021 年 6 月 3 日	4人連携し救命措置 スケボー中、意識失った男性が―― 松阪、消防から感謝状／三重県	
113	2021 年 9 月 1 日	聖火リレー観覧、倒れた男性救う 連係プレーの5人に感謝状 狭山署 ／埼玉県	
114	2021 年 11 月 26 日	連係プレーで高齢男性を救助 横手市消防、湯	

		沢の2人に感謝状 / 秋田県	
115	2021年12月1日	使われなかったAED、私が学ぶ 8年前、ママはマラソン中に倒れた――	救命できなかった事例
116	2022年2月9日	消防団員に感謝状 倒れた同僚、素早く救護 心肺蘇生やAED 南山城 / 京都府	
117	2022年3月31日	保健所の職員ら、連携し人命救助 伊賀市消防 本部が感謝状 / 三重県	
118	2022年6月14日	経験生かし救命、感謝状 城陽市消防本部、高 石さん・嶋路さんへ / 京都府	
119	2022年7月2日	練習中に心停止、助かった 門司大翔館・田中 選手 第104回全国高校野球福岡大会/ 福岡県	
120	2022年11月20日	5人連携、70代を救命 テニス練習中に心肺 停止状態 中消防署が感謝状 / 三重県	
121	2022年11月24日	救命リレー、つないだ3人 マラソン参加中、 倒れた男性救助 / 北海道	
122	2022年12月5日	命救ったランナー、名誉のリタイア 目の前で 男性が心停止、駆けつけた医師に感謝状	
123	2023年6月2日	乗客ら命救う連携 習志野市消防本部、3人に 感謝状 電車内、男性が心肺停止状態…/ 千葉県	
124	2023年6月28日	AEDで救命、5人に感謝状 中消防署 / 広 島県	
125	2023年7月27日	連係プレー見事、ひとりの命救う 高校野球部 員・審判員・保護者ら / 佐賀県	
126	2023年9月23日	東名、路上に横たわる男性救命 県警高速隊、 女性に感謝状 / 神奈川県	
127	2023年10月4日	仲間とスタッフ、連携して救命 ボウリング中に 倒れ、70歳心肺停止 4人に感謝状/福 岡県	
128	2023年12月22日	海響マラソンで救命、感謝状 実行委、東亜大 生3人・教員に / 山口県	
129	2023年12月27日	女性を救護、日田高生3人に感謝状 地元消防 組合が贈呈 / 大分県	
130	2023年9月7日	男性心肺停止…訓練生かし迅速救命 小平のコ ンサート会場、職員らに消防総監感謝状/ 東京都	
131	2022年5月24日	連携して救命、4人に感謝状 卓球大会の試合 中、男性が倒れ… 松阪地区広域消防組合 / 三重県	追加で発見された記事 のため、最後にな った

* 同じ内容を扱った記事、救命がなされなかった記事、AEDの使用には触れているが状況についての情報が乏しすぎる記事は分析から削除した。

* 使用した記事は、補足資料2の「新聞記事一覧との対応表」を参照のこと。

補足資料 2

新聞記事分析データ 朝日新聞クロスサーチ（2013 年 1 月～2023 年 12 月までの記事）をもとに分析したデータ													
事例 No.	新聞記事 一覧との対 応表	イベ ントの最 中 (1 = Yes)	定期的 に集ま る(管 理者が いる) (1 = いる)	管理者 がいな い公共 空間 (道 路、 駅、ロ ビー、 飲食店 など) (1 = Yes)	一人で 救命 (1 = Yes)	複数 で救 命 (人 数)	救助 者に 知り 合い を含 む (1 = 含む)	救助 者に その 場の 責任 者含 む (1 = 含む)	知識 経験 ある 人含 む (1 = 含む)	救 助 者 は 偶 然 の チ ーム (1 = Yes)	被 救 命 者 年 齢	被 救 命 者 性 別	救命 者性 別 (女 性含 む= 1、 女性 を含 まな い= 0、 不 明)
1	1			1		7	1	1	1	1	73	男 性	1
2	2		1			2		1	1		40	男 性	1
3	3, 4	1				7			1	1	30	男 性	0
4	7		1			2	1	1	1		11	男 性	0
5	8			1		1			1		20	女 性	0
6	10			1		2				1	45	男 性	1
7	12			1	1			1	1	1	不 明	男 性	0
8	13		1			3 以 上	1	1	1	1	16	男 性	0
9	14			1		2 以 上		1	1	1	54	男 性	0
10	16	1				2 以 上		1	1	1	66	男 性	1
11	18			1		4	1		1		40	女 性	1
12	19			1			1	1		1	不 明	男 性	0
13	21		1			2 以 上	1	1	1		17	男 性	不明 (高 校生 とい う記

													載)
14	22			1		7			1	1	51	男性	1
15	24	1				2	1		1		67	男性	0
16	26	1				3			1	1	43	男性	0
17	27	1				7			1	1	65	男性	0
18	28			1		3	1		1		50	男性	0
19	29			1		6	1		1	1	50	男性	1
20	30	1				2			1	1	52	男性	0
21	31			1		5	1	1	1	1	47	男性	1
22	32		1			2			1	1	71	男性	0
23	33			1		3	1	1	1		60	男性	0
24	34		1			2			1	1	40	女性	1
25	35	1				3			1	1	不明	男性	1
26	36	1				2		1	1	1	40	男性	1
27	37	1				3	1		1		70	男性	0
28	38			1		3	1	1	1		47	男性	1
29	39		1			2	1	1			70	男性	0
30	40			1		4			1	1	65	男性	1
31	41			1		4	1		1	1	70	男性	1
32	42			1		3	1	1	1	1	67	男性	1
33	43			1		3	1	1	1		36	男性	0
34	44	1				4	1	1	1		40	女性	1
35	46		1			2	1	1	1		55	男性	1

36	47		1			2	1	1	1		64	男性	1
37	48	1				4	1		1	1	30	女性	1
38	49		1			5	1		1	1	11	男性	1
39	51			1		6	1	1	1	1	1	男性	0
40	52		1			2	1		1	1	60	男性	1
41	53	1				2 以上	1	1	1		?	男性	0
42	54	1				5				1	50	男性	不明 (救急隊員という記載)
43	57	1				3 以上	1	1	1		60	男性	0
44	58		1			6	1		1		35	男性	1
45	60		1			5	1	1	1		45	女性	0
46	61		1			2		1	1	1	64	女性	1
47	62		1			3	1	1	1	1	78	男性	0
48	64		1			3		1	1	1	50	男性	1
49	68		1			5			1	1	79	男性	1
50	69		1			4	1				29	男性	1
51	70		1			3	1	1	1		40	男性	1
52	71		1			7	1		1	1	60	男性	0
53	74	1				8	1		1	1	60	男性	1
54	75		1			3	1	1		1	66	男性	0
55	76		1			8	1	1	1	1	78	男性	0
56	77	1				2		1	1	1	28	男性	0

57	79	1				2			1	1	40	男性	0
58	80		1			2 以上			1	1	55	男性	0
59	81			1		2			1	1	71	男性	0
60	82		1			2	1	1			60	男性	0
61	84、85	1				2	1		1		42	男性	1
62	86	1				6	1		1	1	62	男性	0
63	87		1			3	1	1	1		63	男性	0
64	88	1				3 以上	1		1		60	男性	0
65	89		1			6	1	1	1		68	男性	1
66	90			1		4	1	1	1		68	男性	0
67	91		1			3 以上	1	1	1		不明	男性	1
68	92			1		3		1	1	1	40	男性	0
69	93			1		2			1		70	男性	1
70	94		1			4	1	1	1		60	男性	0
71	95			1		6	1		1	1	70	男性	1
72	97			1		5	1		1	1	50	男性	1
73	98			1		2			1	1	不明	男性	0
74	99			1		2 以上	1	1	1		79	男性	0
75	100			1		3			1	1	60	男性	0
76	101			1		5	1		1	1	37	男性	1
77	102			1		10			1	1	60	男性	1
78	103 ,104		1			6	1	1	1		10	男性	1
79	105			1		3			1	1	55	男性	1
80	106		1			3 以上	1	1	1		52	男性	0

81	107		1			2 以 上	1		?	1	68	男 性	1
82	109		1			3	1	1	1		50	男 性	1
83	110		1			2			1	1	70	女 性	1
84	111			1		3	1	1	1		77	男 性	0
85	112			1		4	1	1	1	1	40	男 性	1
86	113			1		5	1		1	1	70	男 性	1
87	114			1		2			1	1	70	男 性	0
88	116			1		9	1		1		50	男 性	0
89	117			1		4	1	1	1		50	男 性	0
90	131	1				4			1	1	60	男 性	1
91	118		1			2		1	1	1	40	男 性	0
92	119		1			3	1	1	1		17	男 性	0
93	120		1			5	1	1	1		70	男 性	1
94	121	1				3			1	1	40	男 性	1
95	122	1				2			1	1	50	男 性	0
96	123			1		3		1	1	1	40	男 性	1
97	124		1			5			1	1	67	男 性	0
98	125		1			4	1		1	1	50	男 性	0
99	126			1	1				1		27	男 性	1
100	127	1				4	1	1	1		70	男 性	1
101	128	1				5	1	1	1		40	男 性	0
102	129			1		3	1				94	女 性	1
103	130	1				4	1	1	1		60	男 性	1